

令和7年度 第1回 介護福祉学科 教育課程編成委員会 報告書

日時 令和7年10月2日（木）15：00～17：00

場所 zoom形式

参加者 ※敬称略

(委員)

大久保 佳世（社会福祉法人愛和会 特別養護老人ホームはるびの郷施設長）

佐々木 宰（公益社団法人東京都介護福祉士会副会長／認知症介護研究研修
東京センター客員研究員）

(学校：日本福祉教育専門学校)

岸本 光正（校長）

吉田 智哉（副校長）

東 康祐（通学事業部 部長）

齊藤 美由紀（通学事業部 介護福祉学科 学科長）

細野 真代（通学事業部 介護福祉学科 教員）

岡本 啓介（通学事業部 介護福祉学科 教員）

野田 朋法（通学事業部 介護福祉学科 教員）

後藤 健（通学事業部 教学マネジメント推進課 課長）

星 朋美（通学事業部 教学マネジメント推進課 リーダー）

三村 美緒（通学事業部 教務マネジメント推進課 職員）

議題：

- 1) (昨年度議題であった)「東京ケアリーダーズ」との連携授業と、今年度「福祉とキャリア」の授業内容のご報告について
- 2) 留学生向け授業では必要最低限の知識及び国試対策中心になってしまふ現状を踏まえ現場が養成校に教育してほしい部分について
- 3) 留学生的実習記録において、簡素化を検討する上での現場で必要な記録内容について

- 1) 「東京ケアリーダーズ」との連携授業と、今年度「福祉とキャリア」の授業内容のご報告について

・「東京ケアリーダーズ」との連携授業について

[各出席者からの意見]

細野教員)

令和7年の7月9日10日11日の3日間各クラスに介護過程の授業の中で東京ケアリーダーズ3～4名に来てもらい、介護過程の情報収集における現場のリアルな事例を用いたアセスメントの方法と留意点やポイントについて、グループワークを通して学ぶような機

会を設けた。授業の中ではケアリーダーズから利用者の尊厳の保持と、ニーズの把握についての内容を説明した。学生はケアリーダーズに強く関心を持っていて、自分たちも将来そのような活動したいという発言もあった。リーダーズの中にベトナム人の方が2人いたのも学生にとっていい刺激になった。この授業の様子は東京新聞などにも写真が掲載される予定である。また10月も2回この授業を発展させた介護過程における生活課題の把握について考える授業を行う予定。

大久保委員)

東京ケアリーダーズのメンバーというのは高齢協の中の若手介護職員が介護の魅力を発信するための団体である。現場の介護職リーダーや次期リーダーなどメンバーの経験がバラバラであり、かつ教員経験がない中で現場の職員が学生に対して何を伝えられるのか、現場の魅力を含めながら伝えることを準備し、いろいろ工夫して乗り切れたと思う。

リーダーズのメンバーが先輩として何か形を残そうという気負いがあったせいか、一方的になってしまったり、もう既に授業で習った理論の部分を繰り返してしまったりしたのが反省点であった。しかし自分の体験や実際に自分が先輩や上司から言われたことの話ができたことはよかった。

・今年度の「福祉とキャリア」実施予定のご報告について

齊藤教員)

介護福祉分野におけるキャリア形成の方法を学生が自ら考えていくということを目的とした内容を計画している。具体的には第1回目に就職エージェントの就職担当の方に 総論を話していただく。第2回目以降からはサービス別の管理者さんにお越しいただいて、働き方、キャリア形成の方法を話していただく。その他専任教員による自分のキャリア形成の体験談も話して、最後第15回目では学生自身がキャリアプランを作成してみるという内容にする。この授業で一番大事なことは自分自身の人生を自分で切り開いていくという視点を持つてもらうことである。

2) 留学生向け授業では必要最低限の知識及び国試対策中心になってしまふ現状を踏まえ 現場が養成校に教育してほしい部分は何か

[各出席者からの意見]

佐々木委員)

ICFなどは留学生に限らず日本人学生も本当にその意義なども含めてきちんと理解できているのだろうかと思う。学生だけでなく教員や現場経験者さえも意義の捉え方にはばらつきがあるのではないか。

岡本教員)

日本人も理解が難しいこともあるが、留学生は「より」その傾向が強いというところである。利用者主体が理解できない中で、そこを理解させるのに労力を割くと、肝心の介護計画に行き着かないのが我々の悩んでいる部分である。教授力不足といえばそれまでだが何か打開策がほしいところである。

佐々木委員)

そのようなご意見を聞いて日本人と外国人ができるだけ対等な関係で、私達は何を伝

えるべきかと改めて考えていくことが大事ではないかと考えた。

大久保委員)

実習記録の施設概要などをしっかりとやることによって少し解消できるのではないか。自分の働く施設はどのような理念を持ってやってきたかを理解するのは非常に大事だと思う。どうしても体系的なことやいわゆる理論の部分が現場で数年働くと完全に抜け落ちてしまう。だが基本として理論はしっかりと学生に教えると現場に出たときに見るポイントが(入っていない人と比べると)違い、経験も相まってさらに培われていくため、まず基本をしっかりと授業でやっていただくことが質の担保に繋がるのではないか。

3) 留学生の実習記録において、簡素化を検討する上での現場で必要な記録内容とは

[各出席者からの意見]

佐々木委員)

書かせる書かせないという話ではなく、書かせるなら、それを通じて何を考えてもらうのか、何に繋げていくのかという教える側の意図が伝わることが大事だと思う。学校の先生方にこの実習記録にどういう意図があって、どういうふうに悩んでいらっしゃるのかというディープなところを聞きたい。

細野教員)

もともとこの実習記録は養成校で学ばなければいけない内容を含めたことと、法的根拠などは知っておかないとその施設が何のために運営されているか、どの法律に基づいて、その施設のサービスが行われているかというのがわからないのでとても必要なのではないかと思い、実際に国家試験でも出てくる部分もある。施設の方針や沿革についても、サービスの方向性を知る上ではとても大事であり、留学生だから簡素化するのも違うのではないか。

留学生が介護福祉士として日本人と同じようにリーダーとして頑張ってもらうためにはこのような部分はしっかりと教えなければならないと思う。

齊藤教員)

教育効果はすぐに出ないことがある。5年後10年後になってあのときの学びはこういうことだったのだとわかることは多々あると思うので、私達が信念を持って、今すぐに伝わらなくても、大事なことはしっかりと目的感を持って伝えていくことが大事だとまた改めて思った次第である。また、実習は介護福祉士養成カリキュラムの中の4分の1に相当する時間数占める非常に大きな体験学習というところなので、学校で学んでいる知識技術が、実際の実習の場面で統合がきちんとできているかどうかという指導方針、指導方法ももう一度見直していく必要があると感じた。

岡本教員)

先生方の意見は批判しないが、留学生が理解に時間がかかるのは事実。うちの実習の組み立てでの段階1の実習だとそこまで理解させるのは難しいのも事実。ただ改めて、その部分の課題はあります、委員の方の立場から見た意見を知れたのはよかったです。

佐々木委員)

歴史を教えることで日々の学習や実習にも連続性を持たせることが大事だと思う。自分

の国の歴史とつながると理解が促進されることを考えると、自分の国の歴史と繋がるところまでさかのぼるためにも、歴史や沿革を学ぶ必要があるのではないか。

留学生に伝えるためにも、教員自身がしっかり噛み砕いて理解して教員間の共通認識を持つことが大事だと感じた。

大久保委員)

内容よりも、「なぜ」それを書かなければならぬのかきちんと教えるのが先決ではないか。AIに完全に賛成はできないが、外国人受け入れを進める中で取り入れることも一つの手段だと思う。介護福祉士の専門性を考えたときに、自分がしたことをきちんと文字・証拠・根拠として残すことが大事になっていく中で、介護記録が書けないと外国人人材が単なる労働力というようにしか、施設側が捉えられなくなってしまう。養成校にいる2年でそこまでできるようになるのは大変なことではあるが、専門性を身に着けることで根本的な彼女たちの優しさや愛情深さが生かされ、現場でのよい介護につながるのではないかと思う。

齊藤教員)

留学生だからひとくくりに日本語力を低いとするのではなく、彼らに足りない何かを補うことで長所を伸ばすことができると思い、それが何なのか悩ましいところであった。今回委員の先生方の意見が聞けてよかったです。

岡本教員)

当校の実習記録類に余分なところはないとわかつてよかったです。記録指導の部分は改めて考える必要があると再認識できただけでもよかったです。学生の視点に立って感想だけでなく質問の欄を作ることで学生とのコミュニケーションのきっかけになると気づけた。あとは学科としての留学生に対する指導力をあげていきたい。

東部長)

利用者を中心とした枠組みを重要視しないといけないということで大変勉強になった

三村職員)

AIの活用について母国語で考えたことをAIで訳して提出するというのはなしなのか。

岡本教員)

それ自体は悪いことではないが、コピー＆ペーストとの選別が難しい。学生の悪用を防げない。そして施設によってはまだ記録が手書きのところがある。それを考えると難しい。

大久保委員)

その場しのぎではなく、自分の身になっているかどうかが大切。経過措置かつそのように楽をしてしまうのは身にならない。しかし言葉の壁を越えるため、自分の理解が深めるためにAI等を利用するのには、取り入れてもよいと思う。

齊藤委員)

留学生を多数受け入れる学校であれば、そういったAI等の環境を整えることも大切。一方で実習先や就職先で認められていない現状がある以上、現場に則したことを見に着けさせることが重要だと思う。そこが悩みどころである。

佐々木委員)

最先端の機器も、それをきっかけにその人がどう成長していくのかという視点が大切である。

齊藤教員)

いろいろな捉え方がある人を踏まえたうえで、一人ひとりがどうすればいいか考えさせるというのが、教師に必要な姿勢だと感じた。

まとめ

普段の授業で抱えている悩みについてヒントを得ることができた。

現場が養成校に求める部分とは基本をしっかりと入れることである。留学生と日本人で分けることなくしっかりと基本・理念を学ばせる共通認識を教員が持つことが大切である。

また、実習記録においても沿革や理念を理解することで、今は理解できなくても将来働く中で理解できるようになることがある。そのような「なぜ」書かなくてはいけないのかを学生にしっかりと説明していくべき。留学生をひとくくりにせず、一人ひとりが自分はどうすればいいか考えさせる姿勢を教師は持つべきである。

学科でこの方針について議論をしたうえで留学生の個性を引き出す教育をしていく。

以上